

発行日：2010年7月8日

## 関東平野ローカル線の旅 続編

### < 多摩モノレール体験の旅 >

千葉市花見川区 小林 敬

梅雨のさなか外歩きにはいささか不向きな感じもしたが、雨は降っていないので・・・。

数年前から温めていたアイデア「多摩モノレールに乗ってみよう」。

6月末のある日、朝の通勤ラッシュも終わり一息ついた10時半頃に自宅を出発。京成成田線八千代台駅を出発し、本八幡で都営地下鉄新宿線に乗り換え。ちょうどまい具合に、京王相模原線直通の急行橋本行が止まっていたので飛び乗った。11時20分を少し過ぎていただろうか。

例によって新聞を読んだ後襲いかかる睡魔に従順に従いしばし瞑目。気が付いたらもう京王線の地上を走っており、車内アナウンスが「間もなく千歳烏山」と報じていた。

調布を過ぎて本線と分かれて京王多摩川で川を渡ると、これまでとはかなり違う景色に変わった。それにしても、随分奥地まで家を建てたもんだと感心しながら車窓の変化を楽しむ。

**多摩センター**は多摩ニュータウンの中核になる場所で、北側に京王線が南側に小田急線が入ってきて大きなターミナルを形成している。駅頭に立った第一印象は「コンクリートの町」。



起伏の多い場所にできた駅前広場は、主要な所へ移動するのに階段の上り下りが必須で、足腰の弱った老人にはいささか厳しい住環境と見えた。ターミナルの西側に「多摩モノレール」と書かれた駅舎が見えるのを確認して、遅い昼飯。

モノレールへの乗り換えは、階段と手すりに導かれたスムーズな通路になってはいるが、昇降や曲折が多くしかも屋根がないところを歩かなければならない。

京王多摩センター駅構内の表示では、「モノレール駅まで4分」となっていたが、いささか疑問、しかも雨が降ると傘を

開かねばならないとはちょっとサービス不足では？（左上の写真：モノレール駅に向かう）

オレンジ色の帯が入った車体のモノレールは上北台（かみきただい）行。平日の昼間なのにかかなりの乗客だ。始動は静かだし、跨座式モノレールにもかかわらず振動が少なく乗り心地は悪くない。

小田急線と京王線の線路と多摩センターの駅全体を大きく跨いで駅北側の住宅地を睥睨するように走って行き、**松が谷（まつがや）**に到着。

松が谷を過ぎると大栗川の流れと野猿街道の間にある**大塚・帝京大学**に入る。次の**中央大学・明星大学**はもうプラットホームが学生で満杯になっている。

下りる学生と乗る学生の交差が続く。

山あいに差し掛かり、谷を登って行くモノレールの右側に明星大学、左側に中央大学がある。朝夕の通学ラッシュ時にはどうなってしまうだろうか？興味深い。「中央大学・明星大学」を出るとすぐに多摩丘陵トンネルが待ち構えている。丘陵をトンネルで突き抜けると尾根が折り重なったような深い谷間を縫うように走るようになり、程久保川源流にある**多摩動物公園**。京王線の駅とモノレールの駅は道路を一本挟んで位置しており、そのすぐ後ろには動物公園の入り口が控えている。駅の看板に「モノレール一日乗車券



+多摩動物公園入場券がセットで900円」と書いてある。休日にはかなりのお客さんが来るに違いない。

程久保川の流れに沿った谷あいを走り程久保駅に入る。

見下ろす程久保川はやがて右にカーブして、百草園あたりで多摩川に合流するために、モノレールから離れて行く。そして高幡不動の駅に入って行く。京王線の駅の方に視線を送ると高幡不動の五重塔が見える。

やや進路を東寄りにカーブしながら浅川を渡ると北西に向かってカーブし万願寺(まんがんじ)に入る。

国立インターから来る甲州街道の新しいバイパス路が駅の下を走っている。万願寺という寺はどこにあるのだろうかと思って地図を開いてみたが見当たらなかった。

多摩川と並行して北西に走り、少し高度を上げて中央自動車道をまたぐと甲州街道駅に到着。その名の通り駅の下には日野橋を渡ってきた甲州街道が走っている。日野橋の一つ上流にあり、立川市と日野市とを結ぶ立日橋で多摩川を渡る。川を渡ると立川市になり、すぐに柴崎体育館。体育館で汗を流した帰り道だろうか元気なおばちゃんたちの団体が乗ってきてにわかに車内が騒々しくなってきた。

進行方向に立川駅周辺のにぎわいが見えて、その中へ吸い込まれるように入っていく。

立川南ではかなりの乗客が降りて、また新しい乗客が入ってきた。

立川駅を通り抜けて北側に立川北駅がある。どちらの駅もJR立川駅につながっているようだが、なぜこのような作りにしたのだろうか？利用客の立場からすれば、JR立川駅を跨ぐ位置に「立川」と言う駅をひとつだけ作ってくれた方が便利だと思うが。(右写真：街を見下ろしながら走る)



立川北駅を過ぎると車窓の景色は急変する。立川市の官庁街であり文化街であり物流街等々あらゆる面で立川市の心臓部にあたる建物が林立し、その西側に広大な昭和記念公園が広がる。車窓に広がる景色すべてがアメリカ軍が駐留する立川基地だったことなど知らない人の方が多いのかもしれない。昭和40年代には米兵が闊歩する沖縄のような街だったということも。

ベトナム戦争の真ただ中の頃、毎週水曜日だったかが軍用機のエンジンテストの日で、夜を徹してアイドリング運転が行われて、当時住んでいた5~6Km離れた国立の町にも一晩中轟音が鳴り響いて煩かった。

高松から立飛(たちひ)にかけて広がる広いエリアは、立飛企業(旧立川飛行機)という会社の敷地で、その昔ここで飛行機が作られていた。また、高松駅からモノレールのレールは左に大きく支線を分けるが、これは車両基地への分岐点になっている。

泉体育館は市営の体育館があることでできた駅で、柴崎体育館同様におばちゃん軍団が乗りこんできた。

立川市の砂川には、古くから五日市街道沿いに砂川一番から砂川九番まで、番号が付いた地名がある。西端の砂川一番は玉川上水から落ちる残堀川の畔にあり、東端の砂川十番は国分寺市との境に近い若葉町にある。そのほとんどがバス停や交差点名として残されている。また、砂川町はその昔米軍基地の拡張工事に際して地元住民の反対運動で流血の惨事を招いたことで有名になった。今ではそんなイメージはいささかも感じさせない。その砂川地区もかなり農地の宅地化が進んでいるようだが、依然として大規模な農業を営む農地が広がりウドを中心とした有名ブランドまで生み出している。風景から感じるイメージとしては、「都市化とのバランスがうまく取れている田舎」という感じがする。

砂川七番の駅は、芋窪街道と五日市街道の交差点にある。左右の窓には面積の広い裕福そうな農家の農地とともに比較的新しそうな住宅の連なりが混じり合って広がっている。



西武拝島線との交差点玉川上水は、唯一の「乗り換え至便な駅」。モノレールの改札口を出るとすぐ目の前に西武線の改札口がある。多摩センター駅とは大違いだ。駅のすぐ脇に巨大な墓地が広がっており整然と立ち並ぶ墓石群には一瞬目を奪われる。



(右上写真：車窓に広がる墓石群)

立正佼成会付属佼成霊園というらしい。西武拝島線に沿って玉川上水が流れており、兩岸の深い緑のベルトがどこまでも続いているのが見える。(左写真：玉川上水)

玉川上水駅で殆どの客が降りてしまい、これまでにぎやかな話し声が響き渡っていた車内は、突然静かになり、車両の響き

だけが耳に入るようになる。

**桜街道**、東西に走る桜並木がその季節には見事な景観を見せてくれるらしいが、ちょっと季節外れ。

もう私が乗っている車両には数人の乗客しか乗っていない。終点を示す案内のメッセージが流れて上北台に到着。

駅の下は芋窪街道、モノレールの軌道が途切れたところを横切る広い道が新青梅街道。芋窪街道をさらに北進すれば多摩湖に突き当たるはず。このあたりは昔からの地名が残っていてうれしくなる。芋窪・神明・奈良橋・蔵敷(ぞうしき)。

(右写真：終点の上北台駅)

駅の周りをしばし散策の後、再びモノレールの乗客となった。帰路は始発駅でしかも乗客が少ない駅なので先頭車両の先頭の席に座り、少年時代に帰ったような気分で景色を楽しんだ。玉川上水で西武線に乗り換え、武蔵砂川に住んでいる知人宅を訪ねてから帰宅の途に就いた。



新しい鉄道路線は最新技術が投入されており、乗り心地・きれいさ・モダンさ・安全性・美しさなどなど各種視点から見るべきものがある。

広い車内、振動が少なく快適な車輛はありがたくうれしい。モノレールは高いところを走るので景色を楽しむのにも優れている。今回の旅は梅雨時だったので「富士山を眺める」楽しみは果たせなかった。

首都西部の交通機関は主に東京へのアクセスを目的に作られたので、「横(東西)のアクセス」。多摩地区に宅地が広がるにつれて「縦(南北)のアクセス」を求める声が大きくなってきた。そんな要求からできたのが多摩モノレールだと聞いたことがある。縦のアクセスラインが横のアクセスを横切りながら既存路線との乗り換えを可能にしている。乗り換えの利便性については不十分な駅が多いが、とりあえず便利さはあると感じる。さらにモノレールの沿線には、中央大学・明星大学・帝京大学などの大学が点在しており「学生」という大きなマーケットを確保している。

我が町千葉市のモノレール(タウンライナー)と比較してみると、前述のような点ではるかに優れているような気がした。

MRT (Mass Rapid Transit)・LRT (Light Rail Transit) など新都市交通が声高に叫ばれているが、実現している路線すべてが成功事例ばかりとは言い難い。今後さらに有効な新都市交通として成長していくことを期待したい。

以上